

老老犬介護

我が家に19歳になる室内犬がいる。19年前に妻が半ば衝動的に買い求めてきたトイ・プードルである。成犬でも体重3Kgの小型犬で、食事と寝ている時以外は常に走り回っている元気犬であった。ゴムボールを階段の上まで投げても一気に駆け上がり、ボールを口にくわえて前足だけの逆立ち降りをしてくる。そのボールを鼻で押して「投げ催促」をする。何処に投げてもボールを探してくる。あまりのしつこさに「この犬のスイッチを切ってくれ」とまで言われた。ジャンプ力も凄い。「寝る」という言葉を聞くと、ベッドに上がって待っている。妻とのベッドの幅1mの私でも越えられない溝を跳び移る。

このような犬が10歳を過ぎてから、まず「歯周病」になった。「あなたの口を舐めまわした人獣感染症です」。13歳になった時に「乳房の前癌状態です。手術を勧めます」と言われた。犬の13歳は人間だと何歳だ？1歳で子供を産めるのだから18歳ぐらいだろう。2歳はまだピチピチで25歳だろう。その後は1年に5歳ずつ年を取っていくのだろうか。10歳を超えたら1年に10歳だ。私の計算では13歳の犬は人間だったら95歳である。「95歳の乳癌を手術するか？」「した！」。転移して全身状態が悪くなる姿を見たくなかったからである。17歳になった頃から、まず眼が見えなくなってきた。白内障である。室内のいろんなものにぶつかる。耳が悪くなった。呼んでも振り向かない。孫を避ける。よろよろと室内を歩きまわるか、寝ている。食欲はある。朝晩の食事でもドッグフードは食べない。鶏の胸肉か豚のひき肉をレンジでチンして、茹でた白菜、キャベツをみじん切りにしたのと混ぜて出す。排泄は庭でしていたのが室内でもするようになった。怒れない。出たことを喜びながら拭き取って消臭殺菌剤をふりまく。私も介護保険証を貰いながら介護審査会に出ている。「介護度4」の犬と「該当なし」の生活が1日でも永くと願う。
(S・H)



大通公園を望む窓辺から

医療のガラパゴス化現象

医療のガラパゴス化現象という言葉がある。わが国の医療が、世界に類をみない独自の進化を遂げた結果、世界標準と大幅にかけはなれてしまった状態を指す。これはダーウィンの進化論のきっかけとなった、ガラパゴス諸島に生息する生物が、島ごとに独自の進化を遂げたこととの類似による命名であるが、問題は、この現象が日本にかなり限定されているということで、日本の医学研究のレベルが一流と目されているにもかかわらず、現実の医療のレベルでは、世界的にみて著しく遅れている要因となっている。

こう書くと、最先端の抗がん剤や生物学的製剤が、認可の遅れのため、なかなか使用できないという規制当局によるドラッグ・ラグを連想するかもしれないが、ここで述べたのは、そのことではない。問題なのは、世界標準で有効性と安全性が確立し頻用されている薬剤が、不思議なことに日本では使用できないということである。往々にして、他国の医師と話をしている怪訝な顔をされるのがこれで、欧米どころか東南アジアより遅れている。医療において、われわれは、まるで手足をしばられて戦っているようなもので、最終的に被害をこうむっているのが、患者であることは言うまでもない。さらに同時に、その状況に慣らされてしまった医師が、問題意識を持ち得ないという奇妙な現実にも繋がっている。ここでは、あえて具体的な薬剤名は挙げないが、全ての科で1つや2つ典型例が挙げられるはずである。

日本の医師は、その中で最善を尽くしてきたということにもなるが、われわれはもう少し世界水準からみた現状を認識し、最善の医療というものを考え直す時期にきているのではないだろうか。
(HI)